



Veritas No.18(2002.4.1)

目次 (敬称略)

<大学時代に「書物と活字の文化」に親しもう！> 小松秀雄

<大 学 生 活 と 図 書 館> 上 紀子

<教養とそれを阻害するもの> 山 祐嗣

<梨花女子大学校の中央図書館について> 井原麗奈

<オルチン文庫にある「讚美歌集」について その二> 茂 洋

無断転載を禁ず

<大学時代に「書物と活字の文化」に親しもう！>

小松秀雄 総合文化学科教授

「新しい情報メディア」の空間と「メディア・リテラシー」

近年、メディア・リテラシーという言葉をよく耳にするが、それは主にパソコンなどの新しい情報機器を駆使する能力を強調するための言葉である。今は各種のメディアが融合し、映像と音声を瞬時にやり取りできる情報メディアが社会と文化のいろいろな領域に確実に広がりつつある。その反面では、近代の印刷術に基づく活字と書物の文化が浸食され、「活字離れ」が問題視されている。

大学の新生は小さい頃から、新しい情報メディアに慣れ親しみ、パソコンや携帯電話などの最新の情報機器を使う能力には長けているだろう。だが、活字と書物の文化に関しては、どうだろうか。中高年のサラリーマンが現代的メディア・リテラシーの面で遅れており、雇用対策の一環として再教育の必要性が叫ばれているのと正反対のことが、青少年のメディア・リテラシーに関して当てはまるかもしれない。書物と活字の文化が正常または高級であり、逆に新しい情報メディアと文化は異常または低級であると言うつもりは毛頭ないけれども、高度な知識や技術を習得・発展させたり伝達・保存するためには書物と活字は欠かせない。

「書物と活字の文化」の空間と「頭脳の鍛錬」

神戸女学院の図書館新館には、1階の出入り口のあるフロアに図書検索のためのパソコンが備えてあるが、新館の2階から4階までは書棚があり、いろいろな分野の書物（本）がたくさん並んでいて、両側には閲覧と読書のための机と椅子が配置されている。本館の閲覧室は新館とは本棚と机と椅子の配置が異なるが、同じような閲覧と読書の空間がある。そこには、騒々しい映像と音声はなく、テレビやパソコンや携帯電話のメディア空間とは異質な雰囲気漂っている。

図書館の静かな空間に行き、本棚の書物を手にとって読んでみよう。文章を読む過程で想像力を働かせながら、文章から多角的な意味を理解してみよう。映像と音声がない代わりに、読書の過程では思考力や想像力は思う存分に羽ばたくことができるだろう。超難解な専門書に出くわして「頭が空回り」して、読み進まないかもしれない。気にすることはない。読書の悪戦苦闘は決して無駄にはならない。

私は大学1年の4月にカント『純粋理性批判』を読んできたが、最初はちんぷんかんぷんであった。受験勉強と現代的メディアに慣れ親しんだ実践感覚では、高度な専門書を読むことは容易でないが、多くの専門書を読んでいるうちに知らずに読書能力が鍛えられていくだろう。見た目も悪く固い玄米をじっくりと噛んでいく過程で頭脳が活性化されると同時に、美味しい味になり、心身の栄養分も補給できるという。ケーキは見た目もきれいで、余り噛む必要もなく甘い味がすぐに伝わるが、頭脳が活性化されず心身の栄養分は少なく、長い間食べ続けると様々な成人病を誘発するそうである。

図書館の本棚の専門書は取っつきにくいけれども、静寂な空間でじっくりと読んでいるうちに頭脳が刺激され、思考力や推理力や想像力が培われるだろう。

新入生の皆さん、せめて大学の4年間だけでも専門書の文化に親しましましょう！

<大学生活と図書館>

上 紀子 英文学科教授

今日から春四月。多くの時間とエネルギーを費やし、受験を乗り越えてこられた新入生の皆さん、御入学おめでとう。

これからの四年間皆さんは図書館とどのようにつきあっていかれるでしょうか。図書館利用の動機にはいろいろあるでしょうが、図書館を（１）楽しく利用してください（２）根気よく少しの努力を惜しまず活用してほしいと思います。

私達は待ち合わせによく本屋さんを利用します。友達を待っている間、所狭しと台の上や棚に一杯にならべられた数々の本を眺め、手にとり、立ち読みをするのは楽しいものです。図書館はまさにこの立ち読みをするのに最適の場所です。授業と授業の間の空いた時間や休講の時には、ぶらりと図書館に出かければ書架に並んだ沢山の本が立ち読みできるのです。

私の学生時代、図書館はまだ開架式になっていませんでした。カウンターでカードに図書番号を記入し、係りの方に書庫から出してきてもらう形でしたので、本屋さんで味わえる立ち読みの楽しさは限られていましたが、それでも新刊コーナーの本や雑誌室の雑誌を思いのまま読めるのは実に有り難く、楽しく過ごした時間はいい思い出となっています。

開架式になった現在、私達利用者は直接図書を手にとって思いのまま読むことができます。書店と違って混雑ありませんし、何時間でも何の気兼ねもなくゆっくり立ち読みができます。

読みたかったけど受験で読めなかった本、聞き覚えのあるタイトルの本に巡り会うかもしれません。なにげなしにページを開いているうちに心を捉える本と出会うかもしれません。分野別に配架された各階の書棚の間に立ちぐると頭を巡らすと人と自然のあらゆる営みの素晴らしさが文字となって並んでいます。私達利用者の側からすれば、図書館は楽しい宝探しの場といってもよいでしょう。

また、大学生となって図書館利用の大きな動機のひとつとなるのは、授業の中でレポートの課題が出された時でしょう。この場合は、図書館に行ってただ思いのまま立ち読みをするとか、ただやみくもに書棚を探してみるというわけにはいきません。レポートの課題についてこの一冊ですべてが分かるというような受験用参考書のようなものもありませんから、図書館とはちょっとこちらも構えてつきあっていかねばならないでしょう。

ちょうど学習英和辞典を引くのはただやみくもにではなく、何か知りたいことがあってはじめて引くように、レポートで取り上げようと思うトピックを自分なりに的確に持つことから図書館の活用が始まるのです。そしてそれに必要な資料、参考文献を検索し、系統的にしらべていくために図書館を使っていくということになります。

とはいえ、この場合、少々面倒なわずらわしいことも多々あるでしょう。コンピューターの導入で検索は極めて簡単になったとはいえ、検索を上手にしないと無駄な時間を費やすことにもなりかねません。

私自身、検索の方法が悪かったため図書館に入っているのに「該当する本はありません」という答えが返ってきてがっかりした経験が何度もありました。根気が必要ということです。またせっかく調べたお目当ての本や論文が手に入らないこともあるでしょう。こんな場合、だからといってそこで諦めないでいろいろな利用サービスを使うための少しの努力を惜しまずしてほしいと思います。

大学四年間の間には自分なりに絞り込んだテーマで口答発表をしたり、ペーパーを書くことが何度かあるでしょう。そして四年次には卒論作成が待っています。四年間の知的マラソンの第一歩として、効率的、効果的な図書館利用に向けて少しの時間と労力をさいて図書館に馴染んでいってください。

青春という人生の黎明期に読んだ書物の影響は、一生を通じていろいろな形で私達の心の中に残るものです。そんな書物との出会いを可能にする楽しい宝探しの場として、また、授業の中で自分が手掛けたいテーマを系統的に調べる必要が生じた時の重要な情報源として、大学図書館を幅広く活用していってくださることを願っています。

<教養とそれを阻害するもの>

山祐嗣 人間科学部教授

卒業論文や大学院の研究計画書を読んでいて嫌になるのは、「学歴社会の日本の詰め込み教育による弊害云々」というくだりに出くわしたときである。日本の新聞の教育欄などに書かれていることのコピーなのだが、このステレオタイプの認識によって、わたしたちの大学教育がどのくらい歪められているかをじっくりと考える必要があるだろう。これが拡大解釈されると、知識を吸収することが、あたかも個性や感性を阻害する源であるかのような錯覚を与えてしまうのだ。さらに、自分が学ばないことの言い訳にもなってしまう。

確かに、試験用に意味もわからずに断片的知識を機械的に暗記するだけでは学んだことにはならない。しかし、学生を観察していて常に感ずるのは、あまりにも彼女たちの知識が不足していることである。高等学校で習っているはずのこと、新聞や本などを読んでいれば知っているはずのことを知らなさ過ぎるのである。そのために、卒論発表会などで、ちょっと異なる角度から質問されると、とたんに返答に窮したりしてしまう。

一言でいえば、これは、現代の学生の特徴ではなく、わたし自身の学生時代の反省も含めてい
るのだが、日本の大学生の無教養によるものである。教養とは、わたしは、普遍的な真理や原理
を求める人間の認識活動およびそのために獲得された知識だと考えている。神戸女学院大学が学
是としているリベラルアーツ教育の目標でもある。教養を高めるためにはさまざまな知識が必要
で、ときには学習者が「詰め込まれた」と感じられるくらいの知識量が求められることも多いだ
ろう。そのような知識が、現象や理論、考え方の枠組などを、さまざまな側面から検討すること
を可能にしてくれる。その多面性が、普遍への王道である。

個性や感性が潰れるとすれば、「学歴社会で詰め込み教育だから、青少年の非行が生ずる」な
どの、新聞記事の受け売りのようなステレオタイプの知識を詰め込む場合である。どのような
場合が詰め込み教育なのか、日本は諸外国に比較して本当に学歴社会なのか、詰め込み教育だと
なぜ非行が生ずるのか。ステレオタイプの認識は、このような本質的あるいは科学的な知への思
考を停止させる働きがある。断定的で、なんとなく詰め込み教育と非行の因果関係が理解でき
たような気分になるのである。もし詰め込み教育に弊害があるとすれば、このような、思考停止と
いう側面であろう。

では、どうすれば教養を身につけることができるのか。最も簡単な方法は、著者との対話と
して書物を読み、さらに、それで抱いた疑問や意見を誰かと討論することであろう。さらに、そ
の討論から必要になってくる知識を書物に求めればいい。書物は図書館に、討論の相手は友人や
教員というように、大学には豊富に材料がそろっている。忙しそうにしている教員でも、授業中、
授業後、オフィスアワーなどに、そのような討論を吹かけられて嫌がる人は少ないと思う（少
なくともぼくは歓迎である。ケーキを持ってこられて「お茶しませんか」と誘われるよりはずっ
といい）。わたしは、大学の最も大きな使命は、人類の知的遺産を発展的に継承していくことだ
と考えているが、教養の修得はその使命の必要条件であろう。

<梨花女子大学の中央図書館について>

井原麗奈 総合文化学科4年生

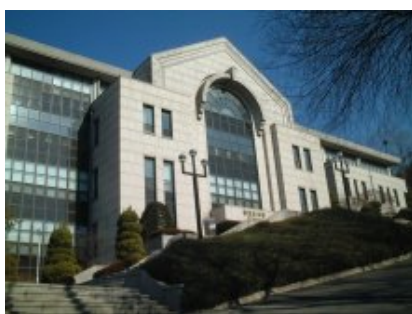
皆様、いかがお過ごしでしょうか？ 私は先月末に日本に帰国致しました。今回は韓国からではなく、日本の自宅からの通信となります。

桜の便りが、日本全国の色々なところから聞かれるようになりましたが、まだまだ朝晩は冷え込みますね。今日は何を着ようかなと、毎朝悩む次第です。このような寒さの事を韓国では「コッ セム チュイ（花を羨む寒さ）」と言います。「寒さが花を羨んで、まだ春にさせたくないと言っているようだ」という表現です。このような気候はあまり好きではないのですが、この表現だけはかわいらしいので気に入っています。

さて、今回は韓国の学生や大学の様子についてお伝えいたしましたが、今回は梨花女子大学の図書館についてお伝えいたします。

梨花女子大学は女学院と比べてはるかに学生が多いので、それに対応するにはやはり大きくて、蔵書の多い図書館が必要です。そこでちょっと、この図書館の歴史と規模についてご紹介。

梨花女子大学図書館



1923年から中央図書館は存在しておりましたが、現在の建物になったのは1984年からです。創立100周年を記念して建立され、延べ面積が約3000坪、約4000席の閲覧室と100万冊の蔵書があります。地下二階、地上五階の現代的な施設を備えた立派な建物です。何よりも、パソコンの施設が充実しているところが素晴らしいです。館内には90台のパソコンが設置されており、24時間使用可能です。そして、個人のノートパソコンを持って来て、学校の

LANに接続できるブースも36席あります。但し、プリンターに接続されているパソコンが3台しかなく、印刷するには1枚につき5円かかるので、その点がちょっと不便でしたね。

1997年には図書館のホームページも開設され、オンラインで蔵書の検索が可能です。その他、館内にある視聴覚室の資料や、全国の大学図書館の蔵書も検索できます。(http://lib.ewha.ac.kr) また、電子図書館が1999年にオープンしました。図書館に所蔵している資料の一部を電子化して、インターネットを通して提供しているサービスです。(http://dlib.ewha.ac.kr) 私はこれらのサービスのいずれも、うまく使いこなせない内に帰国してしまいました。しかし、館内で資料を探そうとすれば、分野ごとにきちんと数字で分類されているので、これらを上手く利用できなくても特別に不便だとは感じませんでした。帯出番号が分かっているにもかかわらず、館内がとても広いので、かえって探し出せない時もありましたので。

このように、図書館の中を本を探しながら歩き回っていて驚いたのが、日本語の蔵書が非常に多いということです。(日本の新聞も置いてあります。「朝日新聞」が毎日読めました。) はっきりした数は分かりませんが、英語で書かれた蔵書と同じくらいの量はあると思います。これは梨花女子大学の図書館だけの傾向ではなく、韓国の図書館全体がそのような傾向にあるそうです。何故なのかと友人に尋ねたところ、「ある分野においては研究が日本の方が進んでいる部分もあるから」という答えが返ってきました。とはいえ、借りている人はあまりいませんでした。それゆえ、日本語の文献を読みこなす事が出来れば、他の人と研究する上で差をつけられるというものの事実のようです。

それに引き換え、日本で韓国語の文献を読んで研究している人は、ほとんどいませんよね。だから、韓国語の文献を読めば他の人と差をつけられるのか?という、それはなかなか難しいかもしれません。確かに差はつけられるかも知れませんが、実行するのが難しいのです。何故ならば、韓国人が日本の文献を読む時は漢字さえ分かれば、文章の大意はつかめます。漢字は表意文字ですから。しかし、日本人の場合、韓国語の資料を読もうとすれば、まずハングルを覚えて、その一つ一つの単語を漢字に変換させながら、考えながら読まないといけないので、かなり時間がかかるのです。ハングルは表音文字なので、そこでこのような差が出てしまうのだと思います。日本の図書館に韓国語の資料がほとんど無い理由の一つはそれだと思います。

最後に、こちらの図書館の運営方法について少しお話致します。授業のある日、資料室は9:00-21:00まで空いています。また、閲覧室に至っては24時間空いています。但し、防犯のため夜中は出入りに施錠され、朝5時までドアは開きません。外からは入れなくて、中に居る人は缶詰状態ということです。よって、試験前になると学生達は図書館に泊まりこんで勉強しています。夜11時でも4000席近くある閲覧室はほぼ満席です。日本ではちょっと考えられない異様な光景です。

また、女学院と違い、図書館に入ると必ずカバンを預けなければなりません。無断帯出を防ぐ対策の一つなのですが、その反面、飲食物の持ち込みは可能です。よって、閲覧室で飲食しながら本を読んでいる人がたくさんいます。日本と韓国、本を守る方法の違いに戸惑いましたね。

では、そろそろこの辺りで失礼致します。前回に引き続き、韓国についての話題となりましたが、ご愛読くださりありがとうございました。皆様に、少しでも韓国がどのような国なのかお分かりいただけたら幸いです。(参考：2001年 梨花女子大学校中央図書館 パンフレット)

<オルチン文庫にある「讚美歌集」について その二>

茂洋 本学名誉教授

前号(17号)の「各教派別讚美歌集の流れ」をご覧になると、明治7(1874)年に、神戸の「組合教会」では二冊の讚美歌集(ともに「無題」、オルチン文庫の番号で06, 09)が発行され、横浜の「一致教会」でも「教のうた」(20)と「讚美歌」(21)の二冊が出版されました。さらに「メソジスト・改革派」は長崎と横浜で「讚美のうた」(61)、そして「バプテスト教会」は横浜で「聖書乃抄書」(38)をそれぞれ出版しました。

その中でもっとも早く出版されたのは、神戸の「組合教会」の讚美歌集「無題」(06)なのですが、それよりも前に横浜ですでにいくつかの讚美歌がつくられていましたが、今のところまだそれらが見つかっていません。でもこの神戸の「組合教会」讚美歌集「無題」(06)のはじめの三つの讚美歌は、横浜の教会で用いられていたものなのです。

この神戸の「組合教会」讚美歌集「無題」(06)は、摂津第一基督公会(現在の日本基督教団 神戸教会のこと)の讚美歌でした。この教会は、明治7(1874)年4月19日に設立されました。最初の牧師はグリーン宣教師でした。そして同時にこの06の讚美歌集が木版で印刷されました。その表紙の絵と最初の讚美歌が16号に掲載されています。またこの讚美歌のローマ字版が、タイプライターで打たれて印刷されています。(07)

この讃美歌には、歌が八つあります。そのはじめの三つが横浜の教会から伝えられました。あとの五つの讃美歌は神戸で作られたものです。横浜からの三つの讃美歌は、どれもルーミスという宣教師と奥野昌綱とが訳したものです。「われのかみに ちかづかん」(S.F.Adams), 「てんちのさきに めぐみさだめ」(C.Wesley), 「われつみもてり いえずじゅうじにしせり」(C.Elliot) です。

神戸でできた讃美歌については次号で説明しましょう。

06-02 「てんちのさきにめぐみさだめ」

第一 讃美歌
 天地のさきはあはれなる
 けがれなきまことの
 父の愛をわらわす
 わまれとけのさきを
 地も海もいよいよ
 ながくてぬさるる
 十字のよみちを
 歩むまことの
 神の愛をわらわす
 みまの海を
 神の愛をわらわす
 かぎりもあはれ